

体育方法専門領域

尾縣貢（筑波大学）、青山清英（日本大学）

1. あらまし

体育方法専門領域は、1955年に発足した「指導に関する部門」を源流とする専門領域である。今日の体育方法専門領域は、「スポーツの練習・トレーニングと指導」を対象とし、コーチング学的研究を専門的に扱う領域で、スポーツ実践におけるさまざまな課題を解決するための実践的研究が志向されている。

コーチング学研究の理論体系は、まず全てのスポーツに通底する内容を扱う一般理論、測定、評定、判定といった種目類型ごとの内容を扱う類型別理論、陸上競技やサッカーといった個別種目の理論である個別理論に大別され、それらはコーチング論、コーチ論、競技力/パフォーマンス論、トレーニング論、試合論といった理論から形成されている。しかし、コーチング学研究の体系は認識科学のような固定化されたあり方ではなく実践や社会に開かれており、学問的な運動体として存在している。コーチング学の学問論を通じて、学としての更なる発展が求められている。

2. 内外の研究動向

体育方法専門領域は、2013年に日本スポーツ方法学会（統合後は日本コーチング学会）との組織統合を果たした。現在では、日本コーチング学会の事業の中で体育方法専門領域の事業が展開されている。

現在、本会の会員数はおよそ1,600名であり、活動としては年2回の機関誌の刊行と日本体育・スポーツ・健康学会大会時と日本コーチング学会大会時の2回の研究発表の機会が設けられ、活発な研究活動が進められている。2017年にはこれまでのコーチング学の学問論に関する議論や研究成果をふまえて、日本コーチング学会よりコーチング学の「知」の体系化をめざした、わが国では初となる本格的な一般コーチング学の叢書『コーチング学への招待』が発刊された。その後、2019年に一般コーチング学と個別コーチング学を橋渡しする役割を担う類型別コーチング学の叢書として『球技のコーチング学』が発刊された。現在、『測定スポーツのコーチング学』（仮）と『評定スポーツのコーチング学』（仮）の出版が準備されている。このような取組によって、一般理論、類型別理論、個別理論の相互補完的な研究の推進が目指されている。

また、他団体との連携としては、アジア太平洋コーチング学会、国際コーチングエクセレンス評議会や国内外の競技スポーツ団体の指導者あるいは学校関係者との連携が進められ、大きな成果を修めつつある。今後はこれらの活動を活性化し、コーチング学の研究成果の指導現場への浸透にさらに寄与することが求められている。

3. 科学的知見の応用の状況

現在、科学的研究は大きな岐路に立っている。日本学術会議は2003年に「新しい学術の体系－社会のための学術と文理融合－」のなかで、従来の科学のあり方とは異なる科学のあり方を提言している。そこでは、「知の統合」を実現するための研究方法論、統合を妨げている原因の究明、統合を促す仕組みや動機付けについて議論が行われている。体育方法専門領域と日本コーチング学会の近年の取組としては、このような科学を取巻く現状をふまえ、後述する機関誌の『編集方針の変更』に見られるように、既存の科学によって導出された知が、実践の課題を解決できるように新たな視点から捉えなおされ、問題解決が達成されることが目指されている。さらに、学会の課題研究として行われた「指導者の暴力問題」研究に見られるように、その知が社会化されることによって、学問あるいは社会との間に新たな連携を創出し、新たな知を生む取組が進められている。

4. 学校体育や大学体育に活かすべき知見

体育方法専門領域と日本コーチング学会は、ここ数年、全ての種目に共通する一般理論としての「一般コーチング学」、一般理論と個別理論を架橋する役割を担う「類型別コーチング学」の体系化に専心してきた。また、シンポジウムや機関誌の企画の中では、「実践研究や事例研究の意義や課題」についても取り組んできた。このような研究成果の実践への応用に関する志向性は、さまざまな議論をふまえて2022年に『『コーチング学研究』の編集方針の変更について』として明記されるに至った（『コーチング学研究』第35巻第2号参照）。このような取組は、科学的知見の練習・トレーニングや指導に関する実践的な課題の解決に対して大きく寄与している。

5. 若手研究者へのメッセージ

機関誌『コーチング学研究』では、上述の「編集方針の変更」をふまえて、実践的な研究を迅速に、数多く掲載できるよう、編集委員会を中心に活動を活発化させている。また、学会発表においても、実践的志向性を強く持つ研究が求められており、若手研究者には積極的な参加と機関誌『コーチング学研究』への投稿を期待している。さらに、科学を取巻く現状をふまえると、研究成果には「社会への貢献」や「知の統合」が求められているので、分析的な研究のみならず、これまでのさまざまな研究成果を「統合化」するような研究成果も求めたい。研究が分業化されて推進される場合には、狭い領域に閉ざされてしまうことが起きがちである。したがって、コーチング学の研究においては、研究成果に関して広い知を結集し俯瞰的に洞察する態度が求められることを心掛けてもらいたい。

6. 引用文献

1. 日本学術会議（2003）新しい学術の体系－社会のための学術と文理融合－、
<https://www.sci.go.jp/ja/info/kohyo/18pdf/1829.pdf>（最終閲覧日2024年5月13日）
2. 青山清英（2022）『コーチング学研究』の編集方針の変更について、コーチング学研究第35巻第2号、pp.185-188.

（2024年5月13日執筆）